

安寧



パラオ諸島ベリリュウ島の夕暮

ホームページアドレス <http://www.himeji-gokoku.jp/>

兵庫縣姫路護國神社報
 「安寧」第十三号
 発行所 兵庫縣姫路護國神社
 〒671-0023 姫路市本町一八
 電話 〇七九-三三四-八九六
 安寧(あんねい)：世の中が穏やかで平和なとこ

英靈の言乃葉

現地召集を受け
 内地の妻への書翰

陸軍軍曹(南洋庁訓導) 仲西 貞夫 命

昭和二十年七月十九日
 パラオ島にて戦病死
 三重県出身 三十二歳

情勢次第に悪化しパラオ島防護の為

昭和十九年七月七日名譽の召集令状を受く

男子の本懐之に過ぐるものなし 又家門の譽なり

勇躍入隊 大君の醜の御楯として米英軍を撃滅せん

戦死の報ありても決して取乱さざる事

魂は靖國の神として永久に皇國を守る

会ひ度くば靖國神社へ来れ

お前の身のことについては父とよく相談せよ

軍人の妻としての体面を保て

父母に孝養を頼む

身体に気をつけて朗かにくらせ

ながらくのお世話ありがたう 深謝す

昭和十九年七月八日

大詔奉戴日

貞子 殿

貞夫



お正月 新年万燈祭の齋行



大しめ縄の架け替え

平成二十六年十二月二十七日例年通り正月準備がほぼ整った。恒例の試験点灯である。同日夕刻境内を飾る二千燈の提灯に明かりがともる。日没が近くなるにつれて淡い光を増す。今年は神戸、読売、産経の各新聞社が取材に来社、翌日にはカラーで紙面を彩った。

本年は市川町の甘地楠田蔵人様をはじめ、十数名の方々のご奉仕で拝殿の大注連縄(九メートル周囲八十五センチ)が十二月一日に架け替えられた。一月元旦午前零時、太鼓の音とともに境内の万燈に明かりが入り拝殿の御扉が開かれる。歳旦祭が齋

行された。

初日が登る頃には尺八や、詩吟の奉納演奏が続いた。二日には雪がちらつき参拝の足が鈍ったが、姫路剣道連盟による新年祈願、四日には消防団の消防車の清祓などさまざま祈願祭が執行された。

本年も昨年に比べて参拝者が一割程度増加した。今年は終戦七十周年でもあり、さまざまな想いをもつてのご参拝であることが想像された。

天皇皇后両陛下

兵庫県行幸啓の砌

幣饌料のご奉納



天皇皇后両陛下 H27.1.17 神戸空港 (日本会議桑原氏撮影)

天皇皇后両陛下には阪神淡路大震災二十周年に際し、記念式典にご臨席のため神戸市に行幸啓された。平成二十七年一月十六日夕刻お泊り所となったホテルオークラ神戸にご到着後、真つ先に県内神社の十社に幣饌料が侍従長より伝達された。

泉宮司は直ちにご奉納の翌日十七日十時大前に奉奠し祭典を執行、ご神靈にご奉告申し上げた。

秋季例大祭齋行



秋季例大祭



姫路市民合唱団の奉納

平成二十六年十一月二日、前日や明け方に小雨が降り、祭典時間も予報は雨であったが、参拝の方々の祈りが通じ、雨が上がった。十時三十分号鼓とともに宮司以下齋員、大川総代会長、三宅崇敬奉賛会会長、藤原神社庁長らが参進、君が代斉唱と続き、海川山野の産物をはじめ、農家から献上された、新米、そして茶道裏千家淡交会西播磨青年部のご奉仕により、抹茶が供えられた。

宮司による祝詞奏上、総代会長、崇敬奉賛会長、兵庫県遺族会長の祭文と続けられた。本年も七百名近くの方の参列があった。今年の秋季祭典は同日終戦七十周年臨時大祭とあわせて齋行される予定である。

崇敬奉賛会

新年祈願祭賑やかに

平成二十七年一月十二日成人の日午前十時よりまず会員の安泰を祈願、宮司が祝詞を奏上、三宅会長が代表で玉串を奉奠、終了後記念撮影。神社会館に場所を移し、和やかに直会がはじまった。

今年は六十名をこえるご参加があり、まずは「夢ノ家くつか」さん演ずる落語「桃太郎」で初笑い。夢ノ家さんは大学時代に落語研究会に属

していたが、六十歳を迎えられてふたたび落語に挑戦。とても素人とは思えない語りで会場は笑いに包まれた。直会は三木英一運営委員長のもと、それぞれがマイクを取って想いを語り有意義に幕を閉じた。



新年祈願祭

お国の誕生を祝って

建国記念の日を祝う会

盛大に

平成二十七年二月十一日午前九時から神社社会館において三名の方々が順次講演。今回は、中島氏は皇紀について、三木氏は新日本建設に関する

る詔書と昭和天皇様のこと。元自衛官の小川氏は東ティモールPKO派遣について熱く語った。十一時から本殿で建国祭斎行、国会、県会、市会議員の有志が参列、本年は初めて姫路市長が参列した。祭典後境内には二百名近くの方が参列、実行委員会、来賓の方々のご挨拶があり、それぞれに歴史と伝統ある日本に生まれた意義を語った。

最後に紀元節の歌を合唱し、式典を終えた。境内では、御餅が振舞われ、あつたかいおうどんの販売、会館では喫茶コーナーが設けられ終日賑わった。



建国記念日

コラム

鳥居前 絵馬のお話

お正月に鳥居前を飾る絵馬は、今年で6枚目になりました。

この絵馬を描いているのは、和田優紀さんと花田康代さんです。初詣に来たお二人に、この絵馬作成について伺いました。

絵馬は、動物の部分と情景の部分に分けて担当別に描いているのとこのことです。

大きな絵は全体のバランスを保つのが難しいようですが、さらに部分ごとに描くのでお互いの意思の疎通が明確でないと、それぞれが主張し合いまともならないそうです。全体像を決定している和田さんが、花田さんにイメージを明確に伝えることによって、うまくまとめているようです。

今年の干支は「未」で、白が主体なので存在感を表現するのに苦労されたとのこと。よく見ると未の毛の部分は、細やかな影が丁寧に描かれ立体的に見えるように工夫されています。また、日本画風にアレンジされ、少し落ち着いた印象を受けます。

「未」を担当された花田さんは、「昨年は、災害など不幸が多かったので、

今年はふくよかで、優しく、そして包容力がある女性らしい年になるように、思いを「未」に込めて描きました」とのこと。

そして、色調が少なく単調になりがち今年干支を、バランスよく華やかな一つの作品にまとめた和田さんは、「この紅い梅の花のように、明るい年になればよい」と言われました。

絵馬は現在も、参集殿入り口に展示されているので、参拝の際には是非もう一度、作者のお二人の気持ち思い浮かべながらご覧になって下さい。



和田さん（向って右側）と花田さん

講演会 第三回戦士の証言

「シベリアに抑留された兵士が語る、
現代に伝えたいこと」

元日本陸軍 荒木 正則氏

一月十一日、酷寒のシベリア強制抑留体験を生き延びられた荒木正則氏を第三回戦士の証言講師としてお招きし、百名以上の参加者が聴講した。

講師の荒木氏は九十一歳を迎えられたとは思えないほどお元気で二時間に亘る講演を立ったままこなされ、終始マイクも必要のないのではないかと思うほどしっかりと声で講演下さった。

荒木氏は大正十三年、熊本県出身。昭和十九年に歩兵第十三連隊補充隊に入隊され、満州国に赴任、ソ満国境警備を務められた。翌年七月には士官教育のために設置された石頭予備士官学校に入校、第一線指揮官として対ソ号作戦の猛訓練を受けられた。同年八月九日ソ連軍が日ソ中立条約を反故にし、満州へ侵攻。関東軍は、在留邦人の引き上げ時間を稼ぐため圧倒的

戦力差の中、奮戦。中でも摩刀石の戦いでは、八五〇名の学徒兵のうち七五〇名が戦死する激戦となり、武器もない中、携帯天幕に爆薬を包み、信管代わりに手榴弾を仕込んで、戦車の下に飛び込んで自爆をするような戦いだった。まさに「陸の特攻」とも言うべき猛攻にソ連軍がひるみ、一旦戦線を退いたおかげで満州から邦人が逃げるチャンスができ、多くの命が救われたと当時を振り返られた。

その後、敗戦、そのままソ連軍の捕虜となり、六十万人を超える人々がそのままシベリアに抑留された。当時、スターリンからトルーマンに対し、「北海道を割譲すれば、捕虜のシベリア移送を行わない」との提案があり、トルーマンがその条件を拒否した事を受けてシベリア抑留がおきていることを考えれば、我々は、北海道と引き換えに

生贄にされたのではないか。」とも語られた。

荒木氏はシベリアで亡くなった戦友のご遺骨収集活動に尽力しておられ、これまで収集したどの遺体も二十代前半の遺体で骨がしっかりしていたと仰っていた、場合によっては遺体が何体も折り重なるように発見されたケースもあったとのこと。気温が零下六十三度となる寒さの中、一日に黒パン一切れと水のようなスープで重労働に従事させられ、四万人の死亡者名簿の死因のほとんどが餓死だったと語られ、「未だに三万體以上の遺体がシベリアの地に眠っている、これからも老骨に鞭打ち、ご遺骨収集を続けていきたい。」と述べられた。

また戦後七十年経った今でも、シベリア強制抑留の真相が明らかにされないことについて、「この悲劇を語り継ぐと共に、真相を明らかにすべく、尽力していきたい。」と言及され、「命を懸けて国を守ろうとした兵士たちのおかげで今、我々が平和に豊かに暮らしていることを忘れずにいて欲しい。国家間の約束など、軍事力の前には簡

単に反故にされるという経験をした人間がまだ日本には私を含め残っている。大東亜戦争時の日本は技術力も資源も乏しく、経済力もまだまだだった。今、経済力も技術力も世界有数でありながら、自ら軍事力を抑制するのはなぜなのか、圧倒的な軍事力の差は惨めな結果しかおこさない。」と当時を振り返って語られた。参加者より「時間の都合でまだまだ聞き足りない、もっとお話を聞ききたい。」そんな感想が聞かれるほど有意義な講演であった。

(運営委員 戸井田真太郎)



荒木氏講演会

旧漢字・旧仮名遣いを学ぶ

(その二)

兵庫縣姫路護國神社崇敬奉賛会

常任理事 三木 英一

第二回目として、大正七年（昭和八年）に読まれていた尋常小学校の修身書五年生用から「徳行」というタイトルで近江聖人といわれた中江藤樹先生のこと書かれた文を味わうことにする。

徳行

中江藤樹は近江のなかえとうじゅ小川村のおがわ人でありませう。幼い時から祖父の家に養はれ、其の後をついで、伊豫の大洲候に仕へてゐましたが、故郷の母を養ふために、役をやめて小川村へ歸りました。

藤樹は貧しい中で、年よつた母に事へて孝行を盡し、又熱心に學問に勵んだので、と

うとう徳の高い學者となりました。そこで、藤樹をしたつて、遠い所からはるばる教を受け17に來る者も多く、馬子のやう18な、學問をしない者までも、其の徳に感化かんかされました。それで世間の人が皆、藤樹を敬うやまつて近江聖人おうみせいじんといひました。21藤樹がなくなつてから、長い年月がたつてゐるが、村の人たちは今でもその徳をしたつて、年々の祭をしてゐます。28

或年、一人の武士が小川村の近くを通るついでに、藤樹の墓をたづねようと思つて、畑を耕してゐる農夫に道をきゝました。農夫は自分が案内しようといつて、先に立つて行つたが、途中で自分の家に立ちよつて、着物をきかへ、羽織まで着て來ました。武士

は心の中で、自分を敬つて、かやうにしたのたうと思つてゐました。藤樹の墓はかについた時、農夫は垣かきの戸をあけて、武士を其の中にはいらせ、自分43は戸の外にうやうやくひざまづいて拜みました。武士はそこではじめて、さきに農夫が着物をきかへたのは、全く藤樹を敬ふためであつたと氣がついて、深く感心して、いねいに墓を拜みました。48

（現在の漢字・仮名の表記）

- ① 14 ② 20 ③ 26 徳
- ④ 2 ⑤ 3 ⑥ 28 ⑦ 31 ⑧ 42 いま
- ⑨ 5 ⑩ 11 ⑪ 15 ⑫ 17 ⑬ 21 ⑭ 23 ⑮ 24 ⑯ 27 ⑰ 30 ⑱ 32 ⑲ 33 ⑳ 34 ㉑ 35 ㉒ 36 ㉓ 37 ㉔ 38 ㉕ 39 ㉖ 40 ㉗ 41 ㉘ 42 ㉙ 43 ㉚ 44 ㉛ 45 ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

中江藤樹について

戦前の教育を受けた人は、教科書で必ず中江藤樹先生のことを学んでいます。今日の日本人はあまり知らない人が多くなっている。ので簡単に紹介しておきます。

中江藤樹（二六〇八〜四八）は江戸時代初期の儒学者で、日本陽明学の祖といわれ、王陽明の知行合一の説に従つて學問の実践を行いました。

『翁問答』や『鑑草』などの著書があります。近江の寒村において、清貧の生活にあまんじながら、母への侍養を尽くす一方、住居に隣接して質素な「会所」を建てて、大洲から慕つてきた門人には「孔子や孟子の学」を説き、また郷党の人びとには「人としての道」を教育善導しました。この藤樹書院から、熊沢蕃山をはじめ、多くの逸材が輩出しました。

明治の思想家、内村鑑三は英文で書かれた名著『代表的日本人』(岩波文庫)の中で五人の日本の偉人を紹介していますが、その一人として「村の先生」として中江藤樹を紹介しています。この書物を通して、当時の多くの世界の教養人は日本人の素晴らしさを学びました。皆様も是非一読して下さい。

シリーズ 英霊の戦場(四)

パラオ諸島

ペリリュー島・アングウル島の戦場

今春、両陛下が強く慰霊を希望されています、激戦地について紹介します。但し、日米両軍が死闘を繰り広げた戦場の実相は紙面の制約で概要に留まります。このシリーズを読まれて、詳細を知りたい方は是非大東亜戦争の各戦場別戦史を読まれることをお勧めします。尚、戦史を選書するに辺り、考慮すべき事項を文末に記します。先ず、この戦場を特徴づけている二点を紹介します。

*天皇陛下から一戦場に巧みな戦術と勇猛果敢な戦闘により戦況を著しく有利にした功績を称えた、ご嘉尚という電報を十一回も受けた事は異例の多さであったこと。

*戦後、米太平洋艦隊司令長官C・W・ニミッツ大将が「諸国から訪れる旅人よ、この島を守る為に日本軍人がいかに勇敢な愛国心をもって戦い、そして玉砕したかを伝えられよ」と敵將から敢闘を称える碑文が建てられたこと。

特にペリリュー島では姫路から参加した部隊があり、その戦闘状況を略記します。

住民・地形・気象

パラオ諸島は第一次大戦後国連の決議で日本に委任統治を認められた準国土であった。島民は六千五百人、日本は二万五千人（他に朝鮮人二千四百人）を移住させ、島の繁栄や安定化に努めて、島民の信頼を得ていた。この信頼により、現在でも親日国として繋がっている。

ペリリュー島

サンゴ礁に囲まれ、海老の頭のような地形をした隆起サンゴの島、中央部は標高六〇〜九〇米級の峻険な山が連なり、多くの自然洞窟・断崖・絶壁・峡谷・亀裂等があり、北部は低山が一部で概ね平坦地である。気象は常夏型で昼夜の温度差は少なく、スコールは恒風または季節風に乘じて発生する。

アングウル島

ペリリュー島南西約十一キロに位置し、燐酸鉱物を混えた隆起サンゴ礁の島、北西部に低山地帯があるほかは概ね平坦地である。

両島の面積・沿岸地形は旧姫路市と比較した地図を参照（但し、アングウル島はペリリュー島との位置関係を無視し、地形・面積を示したものである）

戦場となった経緯

ペリリュー島は日本軍の南西太平洋の補給や制空拠点として輸送機や爆撃機も発着できる飛行場が完備されていた。米軍は比島奪回作戦に、この飛行場を奪って比島防衛の日本軍を空爆する基地とすべく占領を企図した。日本軍はサイパン島防衛線の教訓から米軍に多大の損害を与える作戦に切り替え、島民及び民間人を疎開させ、多数の洞窟陣地を強化し、周到な防衛態勢を構築していた。

ペリリュー島防衛戦

戦闘期間昭和十九年九月十五日〜十一月二十七日

日本軍は歴戦の水戸歩兵第二連隊と高崎の歩兵第十五連隊を基幹とし、姫路から独立歩兵一箇大隊及び海軍航空隊（飛行場勤務）の総勢一〇〇二名、指揮官の連隊

長中川男大佐は孤立無援を覚悟した作戦を立案、全軍一丸となり、全滅するまで七十日間持ちこたえ、米軍に多大の出血を強要し、島の戦術的価値を放棄させた。

米軍上陸部隊は第一海兵師団二八四〇〇名、指揮官ルパート少将は精強な部隊と圧倒的な砲爆撃で日本軍を三日または二日で降伏させ占領出来るとの甘い作戦で強行したが、予想外の大損害を受け、戦闘が長引き、島の戦術的価値がなくなった後も、軍の対面か、占領するまで凄惨な戦いを続けていくことになった。兵器・弾薬で劣る日本軍に何故、大打撃を受けたのか戦闘後一言も言及せず同少将は四か月後に心労による心臓発作で亡くなっている。占領後多くの米軍將校が痛切な反省記録を残している。

姫路部隊（独立歩兵第三四六大隊）の戦闘

大隊長 引野通廣少佐以下五五六名

戦闘期間 九月二十四日〜十月二日

大隊は同島北部の守備を任され、防衛陣地の強化に努めていた。米軍は損害の大きい海兵隊に代わって新たに歩兵一箇連隊を投入、艦砲射撃と多数の戦車の支援を受けて攻撃して来たが、逆襲により撃退し、更に夜襲を決行すべく集結中を発見され集中砲火を受けて損害続出。守備態勢を立て直し中、南北から挟撃され、頑強に抵抗するも島の中央部（司令部所在）と遮断された。米軍は攻撃を緩めることなく我が陣地を再奪取したが、その都度集中砲火を浴びせて多大の損害を与えた。しかし自軍の損害も急速に増大し、終に地下坑道陣地を除いて地上陣地は奪取された。残存将兵を集めて陣地奪回を敢行したが、米軍砲迫の集中火を受け、とん挫。投降勧告を無視し、逆襲を反復し勇戦したが、十月二日終に玉砕した。

アンガウル島防衛戦

戦闘期間 九月十七日〜十月十九日

占領した飛行場の安定使用に脅威となる同島には日本軍は少なくとも二五〇〇名以上が守備していると見積もった米軍は歩兵一箇師団二四〇〇〇名を上陸させた。守備する日本軍は後藤丑雄少佐指揮する歩兵一箇大隊一二〇〇名のみであった。結果として米軍の大海戦術（一対二〇）と戦闘することになったが、巧みな戦術と敢闘精神で、自軍以上の損害を与えた。同島も住民が被害を受けない措置をして守った。

戦闘様相を示唆する両軍将兵証言集から抜粋

○米軍の上陸を阻止する海岸障害物設置中捕まった日本軍兵士（二等兵・一八歳）

「我々は死ぬまで戦う、決して投降などはない」と警告を示唆した。この証言は後に多数の戦死傷者を出して証明されることになり、そしてこの勇敢さは天皇への忠誠心に基づくと判定し、米軍は「天皇の島」と呼称した。★攻撃遂行中、多大の損害を蒙った米軍大隊長が連隊長への無線報告

大隊長「日本兵五〇名以上を斃したが我が大隊は二〇〇名以上の戦死を出し、攻撃続行は困難な状況」

連隊長「こんな報告が本国に知れたら大変な事態に、兎に角攻撃を続行して、一人でも多くのジャップを斃せ」

戦没者（米軍は戦傷者を含む）

ペリリュー島

日本軍…陸軍六六三二名 海軍三三九〇名
米軍…八八四名（内 戦死一六八四名）

アンガウル島

日本軍…陸軍一一四四名 海軍 六名
米軍…二五五四名（内 戦死二六〇名）

姫路護國神社に祭られているご英霊柱

ご英霊は全バラオ諸島ですが大半はペリリュー島
陸軍…五二八柱
海軍…六二柱 計 五九〇柱

付記：占領に長期間を要した為、戦略的価値の無くなった飛行場は主として哨戒機の発着に使用された。米軍の唯一の成果はテナアン島に原爆を運搬後、新たな戦場海域に向かって航行していた重巡洋艦インディアナポリス号が日本の潜水艦に撃沈され、三日間漂流していた衰弱死寸前の艦長他乗組員を発見したことである。

戦史読書のお薦めと選書で考慮する事項

一戦後の自虐史観または或る思想に沿って書かれた史実の一部を



拡張又は捏造した戦史が残念ながら沢山あります。著書の「はじめに」や「まとめ」又は「後書き」を読めば概ね判別できます。

二米軍公刊戦史又は米軍側の戦場体験著書を併せてお読み下さい。近年米国側でも客観的公平な立場で研究し著述された戦史が翻訳出版されています。

日誌抄

二十六年九月、
二十七年三月

- 平成二十六年
- 九月二日 兵庫県神社関係者大会(玉塚)
- 九月二日 スローリドな緑日祈願祭
- 九月六日 生田神社六車宮司就任祝賀会オークラ神戸
- 九月七日 美奈倶楽部(本田商店)
- 九月十日 日本会議講座
- 九月十四日 兵庫縣神社廳役員会(兵庫縣神社廳)
- 九月十七日 播磨人間フオーラム宮司講演於本議所
- 九月十八日 大案内状發送
- 十月五日 菅原神社遷座祭出向
- 十月七日 兵庫縣神社廳大麻濱布祭祭主出向
- 十月九日 大藏神社例祭毛利出向
- 十月十七日 故名管宮司一年祭
- 十月十八日 多可町慰靈祭百六十名
- 十月十九日 立正佼成会参拝
- 十月十九日 佐用町慰靈祭
- 十月二十日 神社本庁評議員会出向
- 十月二十日 赤穂市遺族会慰靈祭
- 十月二十三日 日本会議講座
- 十月二十五日 手柄山慰靈祭
- 十月二十八日 兵庫縣神社廳役員会
- 十月二十八日 近畿調停大会終日神戸国際会議場
- 十一月二日 秋季大祭
- 十一月七日 千種町慰靈祭五十名
- 十一月二十五日 兵庫縣神社廳理事會
- 十一月二十八日 姫路地区神社関係者大会於いて総社
- 十二月一日 月次祭(注連繩奉納)
- 十二月八日 兵庫縣神社廳三地区協議員會
- 十二月十日 調停実務研究会(神戸裁判所)
- 十二月十日 神宮教感謝祭
- 十二月十一日 城養生会クラブ 清掃奉仕
- 十二月十五日 兵庫縣神社廳姫路支部納会
- 十二月十六日 兵庫縣神社廳役員會
- 十二月十七日 兵庫縣神社廳西播地区協議員會
- 十二月二十三日 一斉清掃奉仕 正式参拝 清掃
- 十二月二十七日 試験点灯
- 平成二十七年
- 一月一日 歳旦祭
- 一月二日 姫路剣道連盟祈願祭
- 一月五日 会社祭木祈願祭
- 一月十一日 日本会議祈願祭
- 一月十一日 崇敬奉賛会祈願祭 兵庫縣神社廳姫路支部参拝
- 一月十四日 古札焼納
- 一月十五日 姫路市遺族会参拝
- 一月十六日 天皇皇后陛下神戸行幸啓につき幣饗料伝達式宮司出向
- 一月十七日 幣饗料奉告祭
- 一月十九日 兵庫縣神社廳財務委員会
- 一月二十三日 尼崎総代会正式参拝百二十名
- 一月二十五日 隊友会姫路郷友会父兄会合同新年会
- 一月二十八日 姫路地区神社総代会常任理事會
- 一月二十八日 兵庫縣神社廳理事會
- 一月三十一日 建国祭
- 二月一日 兵庫縣神社廳役員會
- 二月十日 調停研修
- 二月十七日 神政連誼演会出向
- 二月十八日 全国護國神社会出向
- 二月二十日 兵庫縣神社役員會・協議員會
- 二月二十五日 賀室流碑祭
- 二月二十五日 東部「コーゲニア」慰靈祭
- 二月三十日 神社総代会

終戦七十年「時代は変われど祈りは続く」

今年、終戦七十年を迎える節目の年です。崇敬奉賛会では、三つの特別企画を行う予定です。共に、英霊に感謝の気持ちを捧げ、英霊の心を感じましょう。

五月三十一日 井上和彦講演会
 八月十五日 「戦士の証言」特別編
 十月 下旬 (仮)「皇室と護國神社」

主催 兵庫縣姫路護國神社崇敬奉賛会

特別企画第一弾 井上和彦講演会「日本軍かく戦えり」

日時：5月31日(日) 午後2時～
 場所：イーグレ姫路 アイメッセホール 定員 300名
 前売り：1,000円 当日 1,500円
 主催：兵庫縣姫路護國神社崇敬奉賛会
 お問い合わせ：079-224-0896



井上和彦氏